

母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響

——育児頻度の評価及び父母間の評価の齟齬から——

西 尾 新

The effects of father's nursing behavior on mother's childcare stress

——Focusing on mother's evaluation of frequency of father's nursing and the discrepancies in the evaluations of father's nursing between fathers and mothers——

NISHIO Arata

Abstract : The purpose of this study is to examine the influence of father's nursing behavior on a mother's childcare stress. In particular, this study examines the relationship of the mother's childcare stress to the discrepancies in the evaluation of the father's nursing behavior between fathers and mothers. The survey was conducted on mothers with children of three years or younger, who are participating in the K University Childrearing Support Program (76 people, the average age 35.4 years old) and their spouses (fathers : 54 people, the average age 37.19 years old). The mothers were asked about the measure of their childcare stress, the assessment of the frequency of the father's nursing behavior and an assessment of their impression of the nursing behaviors that mothers desire in fathers and the childcare by fathers. On the other hand, the fathers were asked about the assessment of the frequency of their own nursing behaviors and their self-assessment of their childrearing. As a result of using multiple regression analysis and examining the influence of the frequency of fathers' nursing behaviors on mothers' childcare stress, it was revealed that "support for mother," "raising children" and "play support" affected stress due to "lack of support by father." Particularly, it was also revealed that the greater was "support for the mother," the smaller was the stress due to "lack of support by father". In addition, based on the difference between the mothers' assessment scores of the fathers' childrearing and the self-assessment scores of the fathers themselves, the fathers can be divided into the "father overestimated group," the "father and mother assessed equally group" and the "father underestimated group." When ANOVA was performed with these groups as the independent variables, and with the mothers' childcare stress scores as the dependent variable, it was demonstrated that the main effect of father-mother discrepancy factor was marginally significant. This suggests that when the mothers' assessment of the fathers' childcare is low and the fathers' self-assessment is high, the mothers' childcare stress increases, and that the differences in assessment between husband and wife are related to childcare stress.

要旨：本論の目的は、母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響を検討することである。特に本論では、父親の育児行動に対する母親－父親間の評価の齟齬と母親の育児ストレスとの関連について検討した。調査は、K大学の育児支援プログラムに参加する3歳以下の子どもを持つ母親（76名、平均年齢35.4歳）とその配偶者（父親：54名、平均年齢37.19歳）を調査対象とした。母親には育児ストレス尺度（CSS（清水・関水，2010））、父親の育児行動に対する頻度評価、父親に望む育児行動および父親の育児に対する印象評価を尋ねた。一方父親には、父親自身の育児行動に対する頻度評価および自分の育児に対する印象自己評価を尋ねた。

重回帰分析を用いて、母親の育児ストレスに対する父親の育児行動頻度の影響を検討した結果、

「父親の支援の無さ」ストレスに対して、「対母親支援」、「対子ども育児」、「遊び支援」が影響していることが示された。中でも「対母親支援」の頻度が多いほど、「父親の支援の無さ」ストレスが低減することが示された。さらに、父親の育児に対する父-母間の評価の齟齬に基づいて、父親を「父親過大評価群」、「父母等評価群」、「父親過小評価群」に分け、これを独立変数とし、母親の育児ストレス得点を従属変数として分散分析を行った。その結果、父-母間の評価の齟齬の主効果に有意傾向が認められた。これにより、父親の育児に対して母親の評価より父親の自己評価が高いほど、母親の育児ストレスが高くなる傾向が示唆された。

第 1 章

この数十年の間に日本の子育てを取り巻く環境は大きく変化した。第一は社会構造の変化に伴う核家族の増加である。これにより家庭内で育児に関わる人が子どもの両親のみとなり、特に母親の育児の負担が増大したと言われる。第二が地域互助社会の機能が低下で、これにより育児を行う世帯が地域社会から育児支援を受ける機会は減少した。第三が育児に対する価値観の変化であり、子どもを持つことを当然とする「普遍的価値」から、子どもを持つことを生活スタイルの一つの選択肢とみなす「相対的価値」へと変化することとなった。これにより「子育て」に伴う苦勞を「選択如何によってはしなくてもよかった苦勞」と見なされるようになった。母親への育児の集中，“地域社会からの支援の減少”，“選択可能な生活スタイルとしての育児”というこれらの育児環境の変化は、育児に対する負担感を増大させている原因の一つとして考えられる。このような養育者、特に中心的に子育てに関わる母親の育児負担感の増大は、母親の育児ストレスの増大を招くものであり、過度の育児ストレスは母親の健康を損なうだけにとどまらず、子どもの健全な成長を阻害する要因ともなり得るものである。最悪の場合には子どもに対する虐待を招く危険性も高い。

1.1 子育てに対する父親参加と母親の育児ストレス

このような社会的状況のもと、行政も 1994 年の「エンゼルプラン」の策定を契機として、1999 年には「新エンゼルプラン」、2004 年には「子ども・子育て応援プラン」と様々な子育て支援政策を行っており、その計画達成率からみるとそれぞれの政策は一定の効果を上げている。しかしながら、最も育児支援を必要とする核家族世帯における育児の担い手と言えば、母親をのぞけば、母親と並んで子育ての責任を持つべき

父親である (Lamb, 1975)。実際、父親の育児参加に関しては、「仕事をするよりも家庭で家族と共に過ごす時間を大事にしたい」と考えている父親が 80 年代から増加し始め、90 年代には定着したと言われ、今日においては約 7 割の父親が育児参加していると答えている (柳原, 2007)。また、父親の育児行動と母親の育児ストレス、育児負担感との関連について言えば、柏木・若松 (1994) によって、父親の育児参加の頻度が多い場合、母親は育児に対して肯定的感情を持ちやすく、逆に父親の育児参加が少ない場合は、母親は育児に対して否定的な感情を持ちやすいことが示されている。さらに岡本らによれば、「育児参加頻度が低い父親」群と比較して「育児参加頻度が高い父親」群の方が、「健康状態が良い」と答える母親の比率が有意に高く、逆に「育児参加頻度が高い父親」群と比較して「育児参加頻度が低い父親」群の母親の方が「疲労感がある」と答えた比率が有意に高かった (岡本・中村・山口・奥山・標・渡部, 2002)。

上記の 2 つの結果は、父親の育児参加頻度が高いほど、母親の主観的健康感が高く、疲労感が少なく、育児に対して肯定的な感情を持っていることを示しており、母親の育児ストレス低減のためには父親の積極的な育児参加が重要であることを意味している。よって、近年の育児に積極的な父親の増加傾向は、母親の育児ストレスをより低下させる要因として働くと考えられるであろう。

しかしその一方で、6 歳未満の子どものいる世帯夫婦における 1 日の平均育児時間は、父親が 37 分/日で母親の 10 分の 1 程度である (柳原, 2007)。また、父親が行う育児は、「子どもとの遊び」や「入浴介助」などの割合が高く、「食事介助」や「排泄介助」などのような専門的な知識や技術を必要とする育児行動の割合は低く、父親が行う育児にはその内容において偏りが見られることも明らかになっている (岡本ら, 2002)。また北村らによると、このような父親が行う

育児に対して母親は、「お手伝い的で場あたりのな父親の育児」を物足らなく感じ、父親に対し主体的かつ日常的な関わりを望んでいることを示している（北村、佐鹿、大久保、佐藤、1999）。さらに近年の調査によれば、子どものいる20代から40代の主婦にとってストレスを感じる対象として最も多く挙げられるのは夫であり、約6割の人にとって夫はストレス源となっている、との報告がある（LION「バイバイ！ママストレスプロジェクト2012より」）。

一方その育児の担い手である父親が置かれている状況に目を向けるならば、育児に注力したくてもできない社会状況が存在する。たとえば2007年の連合総研の報告によれば、子どもと夕食を共にできるであろう19時30分までに帰宅できる男性は、全体の4割弱にしかすぎず、子育ての中心的世代とも言える35歳から39歳では約2割の男性が、帰宅時間が22時以降と報告している。このような帰宅時間では、子どもに対して「食事介助」、「就寝介助」などは行えず、結果的に一時的で、補助的な育児にならざるを得ないのである。

ここまで検討してきたように、父親の育児参加は年々増加傾向にあり、母親にとっては最も身近で有力な育児資源として重要な役割を果たし得るもので、積極的な育児参加は母親の育児ストレスの低減に効果があることが示されている。またその一方で、父親の育児は一時的、補助的で、言わば気が向いたときの育児となりがちであり、そのような父親の育児のあり方自体が母親にとってストレスを増大させる可能性があるのである。言わば父親の育児はそのありよう如何によって「母親の育児ストレスを低減させる重要な育児資源」にも、また「母親にとっての最大のストレス源」にもなり得るのである。当然ながら、子どもの健全な成長にとって母親の過度の育児ストレスは避けられるべきであり、父親の育児参加も母親の育児ストレス低減へと方向づけるべきものである。しかしながら社会状況、経済状況が厳しさを増す今日、仕事中心の生活を送らざるを得ない父親も少なくない。このような父親に限られた資源の中で如何に子育てに参画し育児中の母親を支援し得るかは、育ちゆく子どもたちの環境をより良いものにするためにも検討すべき重要な課題である。よって本論では、母親の育児ストレス低減のために父親の如何なる育児行動が有効であるか、また母親は父親に対して如何なる育児を期待しているかを検討することを目的とする。

1.2 母親の育児ストレスに影響を及ぼす父親の育児行動

母親の育児ストレスと父親の育児行動との関連を検討した先行研究によると、先にも述べたように父親育児参加が母親の主観的健康感（岡本ら、2002）の低減や育児に対する肯定的評価と関連を示し（柏木・若松、1994）、父親の育児参加が多いほど母親の育児ストレスを低減させることが予想される。しかしながら、岡本ら（2002）、柏木・松木（1994）の調査では、父親の育児行動が単一カテゴリーとして測定されており、父親の如何なる育児行動が母親の育児ストレスと関連を示すかに関しては不明である。また、目的変数となる母親の育児ストレスに関しても、清水（2001）によれば「心身の疲労」、「育児不安」、「父親の支援の無さ」の3つの下位因子からなることが指摘されており、育児ストレスも単一のカテゴリーとして扱うことは不適當であると考えられる。以上のことから、母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響を検討する場合、「父親の育児行動」および「母親の育児ストレス」に関して、より細かい下位因子ごとの検討がなされるべきであり、母親の如何なる育児ストレスに、父親のどのような育児行動がどの程度影響を及ぼすかが検討されるべきであろう。

この問題に関して既に上記の観点からいくつかの研究が行われている。たとえば、三上・掛谷（2011）は父親の育児行動を10項目に分類し、項目ごとに母親の育児ストレスとの関連の検討を行っており、結果として母親の育児ストレスと関連する父親の育児行動の特定に成功している。しかしながら、例えば「子どもに食事の世話をする」とことと「子どもの排せつの世話をする」との間や「子どもをお風呂に入れる」とことと「子どもを着替えさせる」とことの間には相関関係が測定され得るであろう。言わば、多岐に亘る育児の内容を比較的少数のカテゴリーにまとめられる可能性が考えられるのである。これにより、母親の育児ストレスの説明変数として、より包括的でよりシンプルな説明モデルを作ることにも可能となる。この点に関して尹ら（2011）は父親の育児参加の促進・阻害要因の検討の中で、複数の育児行動を「子どもとの遊び」、「基本的育児」の2カテゴリーに分け、これらの頻度を目的変数として分析を行っている。尹ら（2011）は、父親の育児行動を2カテゴリーに分類することの妥当性を示す統計的な検討は行っていないが、他の説明変数を加えた構造方程式モデリングによる確認的因子分析の結果、この2カテゴリーは父親の帰宅時間、母親の出勤

時間、末子の年齢、親との同居の有無と関連を示し、これにより 2 カテゴリーに分類することの構成概念妥当性は示されている。

本研究では、母親の育児ストレスに影響を与える可能性のある父親の育児行動を複数取り上げ、それらを比較的少数の下位カテゴリーにまとめるため、因子分析を行い、その妥当性を検証したのち、母親の育児ストレスとの関連を検討することとする。その際、「母親に対する支援」を父親の育児行動の下位カテゴリーに加えることとする。具体的には「母親に対して労いの言葉を掛ける」、「母親が自由な時間を持てるよう努める」、「話し相手になる」などである（以下「対母親支援」とする）。「対母親支援」を育児行動のうちに含めた理由としては、父親が行うこれらの行動が母親の育児ストレス低減を促進する可能性があるためである（三上・掛谷, 2011）。

1.3 母親の育児ストレスに影響を与える要因の検討

母親の育児ストレスに対する父親の育児の影響を検討する研究において、母親の育児ストレスを目的変数とした場合、その説明変数として父親の育児行動の頻度が取り上げられることが多い（尹・朴・近藤・桐野・中嶋, 2011；岡本ら, 2002；柏木・若松, 1994；三上・掛谷, 2011）。父親の育児への関わり方を研究の変数として組み入れる場合、その行為の頻度を変数として用いるのは当然であろう。しかしながら、現在最も広く受け入れられている Lazarus & Folkman のストレスモデルによれば、ストレスを引き起こすのは、主体の環境に対する評価であるとされている。すなわち、主体を取り巻く環境そのものがストレスを引き起こすのではなく、ストレスの有無は、その環境が主体によって有害なものとして評価されるか否か、あるいは環境が主体によってコントロール可能なものとして評価されるか否かの如何によるのである（Lazarus & Folkman, 1984）。この認知的要因を組み込んだストレス概念を育児ストレスに当てはめて検討するならば、父親の育児行動頻度のみの検討では不十分であることが明らかとなる。例えば、父親の育児行動の頻度が少なくても、母親が、父親の仕事の状況から考えて、その頻度であることに納得していれば、ストレスを引き起こす動因とはならないであろう。逆に、どれほど高い頻度で父親が育児行動を行ったとしても、母親がそれに満足しなければストレスを引き起こしてしまう可能性があるのである。

このように、母親の育児ストレスを目的変数として

考える場合、それに影響を与える要因として検討すべきは、父親の育児に対する母親の認識、評価となるであろう。よって本論では、①父親の育児行動毎の頻度に対する母親の評価、②父親の育児全般に対する母親の印象評価¹⁾、③父親の育児に対する父親自身の自己評価と母親による印象評価との齟齬の 3 つの変数を用いて、母親の育児ストレスと父親の育児行動との関連を検討する。

1.4 本論の目的と方法の概要

本論では以下の 3 点を目的とする。第一は、父親の育児行動の頻度と母親の育児ストレスの関係を明らかにすることである。すなわち、父親の如何なる育児行動が、母親のどのような育児ストレスをどの程度低減させるかを明らかにすることである。これに関しては、上で述べたように、父親の育児行動および母親の育児ストレスに関してそれぞれ下位カテゴリーを指定し、その信頼性、妥当性を検討した上で、育児ストレス下位カテゴリー毎にそれに対して父親の育児行動下位因子がどのように影響するかを検討する。第二は、父親の育児行動頻度を、母親、父親それぞれがどのように評価しているかを明らかにすることである。これによって、父親の育児行動頻度に対する父親の自己評価と母親の評価との違いを検討する。またこれに加えて、母親が評価する父親の育児行動頻度と母親が父親に望む育児行動について検討する。第三は、父親の育児行動に対する、母親、父親のそれぞれの印象評価を検討することである。先にも述べたようにストレスは、主体が環境をいかに認識するかという、認知的側面の影響が大きい。よって、場合によっては、母親の育児ストレスは、父親の育児行動の頻度評価よりも印象評価との関連を示す可能性も考えられるであろう。また、父親の育児行動に対する母親の印象評価と父親の自己評価との差の検討や、夫婦間の印象評価の齟齬と母親の育児ストレスとの関連について検討することが可能となる。

第 2 章 方 法

2.1 調査対象

K 大学構内で実施されている子育て支援プログラムに参加している 0 歳～3 歳までの子どもをもつ参加者（母親）と、その配偶者（父親）を対象として質問紙調査を行った。調査の対象は 77 家族であった。

2.2 調査期間

調査期間は予備調査を含めて 2011 年 7 月から 2011 年 11 月の間で行った。

2.3 調査用紙の配布と回収

質問紙は、母親用と父親用の 2 種類を用意し、調査用紙はすべて無記名回答とした。ただし、分析の際、母親－父親の組を対応させる必要がある。その為母親用、父親用が対になるよう同一の夫婦が同一番号になるよう質問紙番号を予め割り当てておいた。母親にはプログラム参加中に調査説明用紙を読んでもらい、調査協力の同意を得た人を調査対象者として、質問紙を配布しプログラム参加中に無記名で直接記入してもらう方法を取った。また、その配偶者（父親）への調査は、母親に調査説明用紙、質問紙（父親用）、返信用封筒（切手貼り付け済み）を自宅へ持ち帰ってもらい、父親の調査への協力を依頼した。父親への質問紙の回収方法は郵送とした。父親、母親とも、質問紙への回答をもって、調査への同意とした。また、同プログラムは、学生の教育の場でありかつ教員にとっての研究の場として位置づけられており、プログラムの参加者は調査研究への依頼の可能性があることを、プログラム参加時にあらかじめ了解を得ている。

2.4 調査内容

2.4.1 母親に対する調査内容

母親に対しては主に以下の 5 つの事柄について質問した。すなわち一つ目は、母親が感じている育児ストレスについてである。二つ目は、父親の育児行動頻度に関する母親からの評価である。三つ目は、母親が父親に期待する育児行動である。四つ目は、父親の育児行動全体に対する印象評価である。五つ目は、母親の基本属性についてである。

母親の育児ストレス：母親の育児ストレスに関しては、清水（2001）が作成した「育児ストレス尺度」の短縮版である「育児ストレス尺度（短縮版）」（清水・関水，2010）を用いた。その理由としては、①清水の育児ストレス尺度が母親の認知的側面に焦点を当てて作成されていること（清水，2001）、②育児ストレスを構成する 3 因子全てにおいて十分な α 係数が得られ信頼性が示されていること（清水，関水，2010）、③母親の育児に関する他の尺度とも予想された有意な相関が示され構成概念妥当性に関して十分な検討がなされていること（絶望感尺度（桜井・大谷，1997）と正の相関（清水，2001）；「主観的幸福感」尺度（伊藤

ら，2003）とは負の相関（清水・関水，2010）；「子育て完全主義」尺度（桜井ら，2003）と正の相関（清水・関水，2010））、さらに、④「育児ストレス尺度（短縮版）」を構成する下位因子に「父親の支援の無さ」という父親の育児行動に関する因子が含まれており本調査の目的と合致することが挙げられる。

育児ストレス尺度（短縮版）（清水・関水，2010）は 3 因子 16 項目からなる。第一因子は「育児不安」で「育児のことを考えると漠然とした不安を覚える」、「子どもの知的能力に気がかりがある」、「同じ年頃の子どもの様子を知ってわが子が劣っているのではないかと不安に思う」などの項目からなる。第二因子は「心身の疲労」で、「子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い」、「育児で身体の疲れがたまっている」、「育児のために睡眠不足の日々が続いている」などの項目からなる。第三因子は「父親の支援の無さ」で「夫は子どもより自分の生活を中心に考えている」、「夫の子育ては不完全でかえって迷惑なことをする」、「夫が私の育児生活の苦勞を理解してくれない」などの項目からなる。育児ストレス尺度（短縮版）の 16 項目はランダム化され、「当てはまる」（5 点）から「当てはまらない（1 点）」までの 5 検法で質問した。

父親の育児行動頻度に関する母親の評価：父親の育児行動頻度に関する母親の評価をするために、まず父親の主な育児行動として、父親の育児行動に関する先行研究（岡本，2002；北村ら，1999；柳原，2007）から以下の 11 項目を父親が行う主な育児行動として抽出した。

表 1 父親の育児行動リスト

1. 子どもをお風呂に入れる。(入浴介助)
2. 子どものオムツ、トイレの世話をする。(排泄介助)
3. 子どものミルク、食事の世話をする。(食事介助)
4. 子どもを寝かせる。(就寝介助)
5. 子どもの保育園・幼稚園などの送迎。(園送迎)
6. 子どもと一緒に遊ぶ。(遊び)
7. 子どもの歯磨きを手伝う。(歯磨き)
8. 炊事、洗濯、掃除、などの家事をする。(家事)
9. 母親の話し相手になる。(話し相手)
10. 母親の自由な時間を作るよう努める。(自由な時間)
11. 母親に対してねぎらいの言葉をかける。(労い)

上記の 11 項目において、1 から 7 までの項目を、直接子どもに働きかける育児行動という意味で「対子ども育児」とした。また、8 から 11 までの項目を育児する母親を支援することによって間接的に育児に関

わるものとして「対母親支援」とした。当然のことながら、上記の家事や話し相手、母親の自由な時間、母親に対する労いの言葉などの「対母親支援」を“育児行動”とみなすか否かという議論が考えられるであろう。この点に関して本論では、父親のとり行動の中で母親に対する支援は、母親の負担感を軽減し、ひいては母親の育児ストレスを軽減する可能性のあると考え、これを父親の育児行動に含めることとした。育児行動リストとして上にあげたこれら父親の育児行動に関して、「よくする (5 点)」から「全く行わない (1 点)」までの 5 件法で母親に回答を求めた。

母親が期待する父親の育児行動：母親が父親に行ってほしいと期待する育児行動を検討するために、父親の育児行動頻度に関する母親の評価と同様に、表 1 に示した父親の育児行動リストに従って、「とても望んでいる」(5 点) から「全く望まない」(1 点) まで 5 件法で評価させた。

父親の育児に対する母親の評価：父親の育児に対する全体的な評価を知るために、父親の育児に対して 10 点を満点とする印象評価を尋ねた。

母親の基本属性に関する質問：母親の育児に関わる基本属性を知るために、フェイスシートで以下の項目について質問した。具体的には、母親の年齢、母親の就業形態（専業主婦、フルタイムの仕事、パートタイムの仕事、アルバイト・内職、家業・自営業）、父親の職業（会社員・公務員、団体職員、自営業、その他）、家族構成、夫以外の育児資源の有無である。

2.4.2 父親に対する調査内容

父親に対しては、主に以下の 3 つの事柄について質問した。一つ目は、父親の育児行動頻度に関する自己評価である。二つ目は、父親の育児行動全体に対する印象評価を、10 点を満点として自分自身で何点をつけるか、育児に関する自己評価を尋ねた。三つ目は、父親の基本属性について尋ねた。

父親の育児行動頻度に関する自己評価：父親自身による育児行動頻度に関する自己評価を尋ねた。具体的には、表 1 で示したリスト項目の内容について、「よくする」(5 点) から「全くしない」(1 点) まで 5 件法を用いて、父親自身による頻度評価を尋ねた。

育児に関する父親自身の自己評価：父親自身が自らの育児を全体としてどのように評価しているか知るために、自分の育児に関して 10 点を満点とする印象の自己評価を尋ねた。

父親の基本属性に関する質問：父親の基本属性に関する質問を尋ねた。具体的には、父親の年齢、父親の就

業形態（会社員・公務員・団体職員、自営業、その他）であった。

2.5 倫理的配慮

本研究を実施するにあたって、平成 23 年度研究者所属大学の研究倫理委員会の審査による承認を受けた。本研究の調査に先立ち甲南子育て広場の先生方に研究目的、方法、意義、守秘義務、研究協力および協力拒否が可能であることを説明し、研究協力への承諾を得た。また調査者本人により、母親プログラムに参加する母親に対して本調査の目的及び内容について説明し、調査協力への承諾を得た方のみ調査を依頼した。また調査用紙にも同様の内容を記入した。回答は本人の選択に基づいて記入できるようにし、回答をいただいた調査用紙については、本研究以外にデータを用いることはせず、分析終了後に個人情報保護法に基づき適切に廃棄することを調査用紙に明記した。

第 3 章 結 果

3.1 調査協力者の基本的属性

3.1.1 調査協力者の回答数及び年齢

母親に対しては 78 名に対し質問紙を配布し、77 名から質問紙を回収した。77 名のうち欠損値のある 3 名を分析から除き、74 名を分析対象とした。母親の平均年齢は 35.40 歳 ($SD = 4.9$, $\min = 26$, $\max = 60$) であった。一方、父親に対しては 78 名に対して質問紙を配布し、56 名から回答を回収した。56 名のうち欠損値のある 2 名を除き、54 名を分析対象とした。父親の平均年齢は 37.19 歳 ($SD = 5.16$, $\min = 24$, $\max = 50$) であった。

3.1.2 調査協力者の就業形態

母親の就業形態としては、「専業主婦」が 64 名であり調査対象者の 84% を占めた。一方父親の就業形態に関しては、有効回答数 74 名のうち 64 名が「会社員・公務員・団体職員」、10 名が「自営業」であった。

3.1.3 子どもの数

調査対象者の子どもの数は、「一人」が 54 名、「二人」が 19 名、「三人」が 1 名であった。

3.1.4 夫以外の日常的な育児資源の有無およびその内訳

夫以外で育児に日常的に協力してくれる人の有無を尋ねた結果、日常的に協力してくれる人がいる対象者は 38 名であった。一方、育児に日常的に協力してくれる人がいない対象者は 36 名であった。また、育児

表2 調査対象者の基本属性

年齢	平均	SD	min	max
母親	35.40	4.90	26	60
父親	37.19	5.16	24	50

就業形態	
母親	人数
専業主婦	64
フルタイムの仕事	3
パートタイムの仕事	6
その他	1
父親	人数
会社員・公務員・団体職員	61
自営業	10
その他	3

夫以外の日常的な育児支援の有無	人数
支援有り	38
支援なし	36

夫以外の日常的な支援の内わけ（複数回答）	人数
別居の父母	32
近所の知人	7
同居の父母	4
公的な育児サービスの利用	1

に日常的に協力してくれる人の内わけを見てみると、最も多かったのが「別居の父母」で32名、次いで「近所の知人」が7名、「同居の父母」が4名、「公的な育児サービス」が1名であった（複数回答）。（表2参照）

3.2 前提となる分析

3.2.1 「CSS 短縮版」（清水・関水，2010）の因子構造の確認

本論では、育児ストレスを測る尺度として、清水・関水（2010）の「育児ストレス尺度短縮版」を用い

た。第2章でも述べたように、清水らによると、「育児ストレス尺度（短縮版）」は「育児不安」、「心身の疲労」、「父親の支援の無さ」の3因子からなるとされている。よって、この「育児ストレス尺度（短縮版）」の信頼性を検討するため、「育児ストレス尺度（短縮版）」に対し因子分析を行った。具体的には共通性を1とし、反復推定を行って、プロマックス回転を用いて因子分析を行った。因子数は、固有値が1以上を基準として3因子で行った。

その結果、第三因子までの累積寄与率が52.6%となり、分散の説明率が5割を超えることが確認された。また、第一因子から第三因子までに含まれる16項目も、それぞれ清水・関水（2010）の結果と同様に、項目1から項目6は「心身の疲労」に、項目7から項目12が「育児不安」に、項目13から項目16が「父親の支援の無さ」に分類された。以上のことから、本調査における「CSS 短縮版」の因子分析の結果はおおむね清水・関水（2010）と同様の結果であることを確認した（表3参照）。

ただし、第二因子「育児不安」に分類された項目12「育児のことを考えると、漠然とした不安を覚える」は第一因子に最も因子負荷が大きく（.315）、また第二因子、第三因子にも相応の因子負荷を示したことから、本来ならば、項目12は「CSS（短縮版）」から削除すべきものと考えられる。しかし、項目数が全体で16と少ないこと、項目12を「育児不安」に含めても累積寄与率が5割を超えることを勘案し、先行研究と同様にこれを「育児不安」因子に含めることとした。これにより「心身の疲労」因子が項目1から6の6項目、「育児不安」因子が項目7から12までの6項目、

表3 CSS 短縮版（清水・関水，2010）因子分析結果

	第一因子	第二因子	第三因子	共通性
1 子どもの世話で他のやりたいことができない	0.801	-0.068	-0.054	0.648
2 子育てから解放されて息抜きできる時間が少なすぎる	0.788	-0.030	0.080	0.629
3 子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い	0.725	0.065	-0.115	0.543
4 夜間、育児のために何度も起きなければならなくて困っている	0.621	0.116	-0.018	0.400
5 育児のために睡眠不足の日々が続いている	0.542	0.006	0.117	0.307
6 育児で身体の疲れが溜まっている	0.508	0.126	0.190	0.310
7 子どもの知的能力に気がかりがある。	-0.022	0.983	-0.074	0.972
8 子どもの顔つきや容姿容貌が気がかりである	-0.131	0.717	0.132	0.548
9 同じ年頃の子どもの様子を知ってわが子が劣っているのではと不安に思う。	0.136	0.628	-0.127	0.429
10 子どもにどう接していいのかわからない	0.167	0.617	0.091	0.416
11 子どもの性格が気がかりである	0.087	0.608	-0.062	0.381
12 育児のことを考えると、漠然とした不安を覚える	0.315	0.231	0.154	0.176
13 夫が子育てに協力的ではない	-0.196	0.164	0.885	0.849
14 夫が私の育児生活の苦勞を理解してくれない	0.071	0.062	0.816	0.675
15 夫は子どもよりも自分の生活を中心に考えている	0.077	-0.130	0.770	0.616
16 夫の子育ては不完全で、かえって迷惑なことをする	0.197	-0.166	0.667	0.511
因子寄与率	18.6%	17.5%	16.5%	52.6%

「父親の支援の無さ」因子が項目 13 から 16 までの 4 項目の評定値を合算し、調査対象者ごとの因子得点とした。母親の育児ストレスに関して調査対象者ごとの因子得点の平均を各因子の項目数で割った値を算出したところ、それぞれ「心身の疲労」が 2.71 (SD = .92), 「育児不安」が 1.92 (SD = .70), 「父親の支援の無さ」が 2.04 (SD = .92) であった (表 4 参照)。

表 4 母親の育児ストレス因子得点の標準化した平均値

	心身の疲労	育児不安	父親の支援の無さ
平均 (SD)	2.71 (.92)	1.92 (.70)	2.04 (.92)

3. 2. 2 母親の育児ストレスに対する父親以外の育児支援の有無の影響

本論の目的の第一は、母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響を検討することである。これを明らかにするためには、まず父親以外の育児支援の有無が母親の育児ストレスに対して影響を及ぼしているか否かを検討する必要がある。よって、母親の育児ストレス「心身の疲労」, 「育児不安」, 「父親の支援の無さ」のそれぞれの因子得点を目的変数とし、「夫以外の日常的な支援の有無」と「育児ストレスの種類」を要因として、2 要因被験者間被験者内分散分析を用いてストレス因子得点の平均値の比較を行った。「夫以外に日常的に協力有り群」は 38 名で夫以外の日常的な協力無し群」は 36 名であった。

分析の結果、夫以外の日常的な支援の有無によって、各ストレス因子得点に差は認められなかった (夫以外の支援の有無効果: $F(1,72) = 1.635$, n.s.; 夫以外の支援の有無 \times 育児ストレスの種類: $F(2,144) = 1.673$, n.s.)。以上の結果から今後の分析には、夫以外に日常的に子育て支援の有る群と、無い群を込みにして分析を行うこととした (表 5 参照)。

表 5 父親以外の日常的な支援の有無と育児ストレス () 内は SD

	心身の疲労	育児不安	父親の支援の無さ
支援有 (n=38)	2.522 (0.898)	1.947 (0.778)	1.928 (0.754)
支援無 (n=36)	2.899 (0.900)	1.894 (0.606)	2.174 (1.078)

3. 2. 3 母親が評価した頻度に基づいた父親の育児行動の分類

本調査では、父親の育児行動の頻度に関する母親の評価を検討するために、先行研究から父親の育児行動リストとして 11 項目の育児行動を選定し (表 1 参照), 「母親による父親育児行動頻度評価」尺度を作成

した。この 11 項目のうち「幼稚園, 保育園の送り迎えを行う」は未記入であることが多かったため、以後の分析からは除いた。

第 2 章で述べたように項目選定の上で、父親の育児行動の 11 項目を「排泄介助」や「食事介助」のような直接子どもに働きかける「対子ども育児」と「母親に労いの言葉を掛ける」, 「炊事, 洗濯, 掃除など家事を行う」など母親に対して働きかける「対母親育児支援」の 2 因子構造を措定していた。そこで、前提の確認として 2 因子構造の妥当性を検討するため、母親が評価した父親の育児行動頻度を基に、父親の育児行動 11 項目を因子分析により分類した。共通性の推定を 1 とし、プロマックス回転, 反復推定ありとし、因子数を 2 の場合と、因子数 3 の場合で因子分析を行ったところ、固有値の累積寄与率, 因子寄与率等から検討して、3 因子構造とした方がより妥当であることが判明した。第一因子は食事介助, 排泄介助, 就寝介助に代表されるような「対子ども支援行動」であった。第二因子は母親に「労いの言葉」をかける, 母親の「話し相手になる」に代表されるような「対母親支援行動」であった。第三因子は「子どもと遊ぶ」の 1 項目のみで、第三因子に .983 (共通性 .975) と極めて高い因子負荷量を示した。一項目のみの因子であるが、因子負荷量が高いことと、先行研究においても「子どもとの遊び」は「基本的育児 (尹ら, 2011)」とは別の因子とされていたことから本論でも第 3 因子として扱うこととした。

さらに項目ごとに検討すると、当初、第二因子「対母親支援行動」と措定していた「炊事, 洗濯, 掃除など家事を行う」の項目が、第一因子 (対子ども育児), 第二因子 (対母親支援) のいずれにも .3 程度の因子負荷量を示し、明確に分類することが不可能であった (表 6 参照)。

表 6 母親による頻度評価に基づく父親の育児行動の分類

変数名	対子ども育児	対母親支援	遊び支援	共通性
食事介助	0.831	0.103	-0.084	0.708
排泄介助	0.794	0.126	-0.035	0.647
就寝介助	0.758	-0.101	0.043	0.587
入浴介助	0.575	-0.107	0.347	0.463
歯磨き	0.384	-0.005	0.192	0.185
家事	0.356	0.341	0.043	0.245
労いの言葉	0.013	0.861	-0.104	0.752
話し相手	-0.107	0.746	0.232	0.622
自由な時間	0.081	0.698	0.008	0.494
遊び	0.066	0.069	0.983	0.975
因子寄与	2.523	1.954	1.200	3.720
因子寄与率	25.2%	19.5%	12.0%	56.8%

「家事」の項目がいずれの因子にも高い因子負荷量を示さなかったため、本項目を削除した上で、因子数を3、共通性の推定値を1、プロマックス回転、反復推定ありの条件で再度因子分析を行った。その結果、「対子ども育児」因子、「対母親支援」因子、「遊び支援」因子の3因子構造で、累積因子寄与率が62%と相応の因子寄与率を示したことから、3因子構造を採用することとし、父親の育児行動に関わる以下の分析においては「対子ども育児」、「対母親支援」、「遊び支援」の3因子により分析することとした（表7参照）。また、それぞれの因子毎に、各因子に属する項目についての評価値を加算するリッカート法を用いて、調査対象者ごとに因子得点を算出した。

表7 母親による頻度評価に基づく父親の育児行動の分類（修正後）

変数名	対子ども育児	対母親支援	遊び支援	共通性
食事介助	0.811	0.097	-0.074	0.673
就寝介助	0.789	-0.087	0.007	0.630
排泄	0.783	0.121	-0.031	0.629
風呂	0.578	-0.100	0.314	0.443
歯磨き	0.416	0.028	0.152	0.197
労い	0.019	0.845	-0.093	0.724
話し相手	-0.082	0.762	0.197	0.626
自由な時間	0.091	0.695	0.000	0.492
遊び	0.050	0.046	1.094	1.201
因子寄与	2.418	1.824	1.372	
寄与率	26.9%	20.3%	15.2%	62.4%

3.3 母親の育児ストレスに対する父親の育児行動頻度の影響

父親の育児行動の因子分析から示された3つの因子、すなわち、「対子ども育児」、「対母親支援」、「遊び支援」が母親の育児ストレス「心身の疲労」、「育児不安」、「父親の支援の無さ」にどのように影響しているかを検討するために、「心身の疲労」得点、「育児不安」得点、「父親の支援の無さ」得点をそれぞれ目的変数として父親の育児行動3因子「対子ども育児」得点、「対母親支援」得点、「遊び支援」得点を説明変数として重回帰分析を行った。

3.3.1 「心身の疲労」に対する父親の育児行動頻度の影響

「心身の疲労」得点を目的変数とし、父親の育児行動頻度（「対子ども育児」得点、「対母親支援」得点、「遊び支援」得点）を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果、「心身の疲労」に関しては父親の育児行動の頻度の影響は認められなかった。（対子ども支援 $\beta = -.15$, n.s.；遊び支援 $\beta = -.02$, n.s.；母親

支援 $\beta = -.15$, n.s.）（表8参照）。

表8 「心身の疲労」を目的変数とした重回帰分析

変数	標準偏回帰係数 (β)	F 値	t 値	P 値	判定
対子ども支援	-0.1498	1.2101	-1.1000	0.2750	
遊び支援	-0.0228	0.0259	-0.1608	0.8727	
対母親支援	-0.1460	1.2454	-1.1160	0.2681	
定数項		58.6221	7.6565	0.0000	**

3.3.2 「育児不安」に対する父親の育児行動頻度の影響

「育児不安」を目的変数とし、父親の育児行動頻度（「対子ども育児」得点、「対母親支援」得点、「遊び支援」得点）を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果、「心身の疲労」と同様、「育児不安」に対しても、父親の育児行動頻度の影響は認められなかった。（「対子ども育児」 $\beta = -.10$, n.s.；「対母親支援」 $\beta = -.01$, n.s.；「遊び支援」 $\beta = -.11$, n.s.）（表9参照）。

表9 「育児不安」を目的変数とする重回帰分析

変数	標準偏回帰係数 (β)	F 値	t 値	P 値	判定
対子ども支援	-0.0996	0.5152	-0.7178	0.4752	
遊び支援	-0.1077	0.5551	-0.7450	0.4587	
対母親支援	0.0088	0.0044	0.0663	0.9473	
定数項		41.6029	6.4500	0.0000	**

3.3.3 「父親の支援の無さ」に対する父親の育児行動頻度の影響

「父親の支援の無さ」得点を目的変数とし、父親の育児行動頻度得点（「対子ども育児」得点、「対母親支援」得点、「遊び支援」得点）を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、「対子ども育児」、「対母親支援」、「遊び支援」の頻度が高いと母親から評価されるほど、母親の「父親の支援の無さ」ストレスは低下することが示された。その中でも、「対母親支援」が、「父親の支援の無さ」ストレスに対して最も影響しており、父親が母親に行う直接的なサポートが母親の育児ストレスを低減させていることが示された（重相関家数 $R = .70$, 「対子ども育児」 $\beta = -.30$, $p < .01$ ；「対母親支援」 $\beta = -.37$, $p < .01$ ；「遊び支援」 $\beta = -.22$, $p < .05$,）（表10参照）。

表10 「父親の支援の無さ」を目的変数とした重回帰分析

変数	標準偏回帰係数	F 値	t 値	P 値	判定
対子ども支援	-0.3048	9.6155	-3.1009	0.0028	**
遊び支援	-0.2210	4.6563	-2.1578	0.0343	*
対母親支援	-0.3716	15.4811	-3.9346	0.0002	**
定数項		197.1192	14.0399	0.0000	**

3.4 母親による父親の育児行動頻度評価と父親の育児行動への期待

母親による父親の育児行動頻度評価と父親の育児行動への期待に関して、表 1 の父親の育児行動リスト項目ごとに平均値を算出した（図 1 参照）。その結果、母親が父親の育児行動として頻度が高いと評価しているものは、「子どもと遊ぶ」ことであった（4.18）。ついで、「母親の話し相手になる」（3.99）、「入浴介助」（3.53）、「労いの言葉を掛ける」（3.50）が高い頻度を示した。一方、頻度評価の最も低かったものは「就寝介助」（2.50）であった。

母親が父親に期待する育児行動については、全ての項目において、母親による父親の育児行動頻度評価の値を上回った²⁾。最も高い期待が示された項目は、頻度評価と同様に「子どもと遊ぶ」（4.76）であった。次いで期待として高かったのは「労いの言葉を掛ける」（4.43）、「話し相手になる」（4.36）、「入浴介助」（4.13）であった。

父親の育児行動頻度評価と父親に対する期待の評価点の差が少なかった項目は、「母親の話し相手になる」、「入浴介助」であった。一方、評価点の差が大きかった項目は「就寝介助」、「母親に自由な時間を作る」で、いずれも 5 段階評価で 1 点以上の差が認めら

れた（表 11 参照）。

3.5 父親による育児行動頻度の自己評価

父親の育児行動頻度評価に関して、父親自身の自己評価の評定値を項目ごとに平均を算出した。その結果、育児行動リストの中で最も頻度評価の高かった項目は「子どもと遊ぶ」（4.17）であった。次いで自己評価の高かった項目は「母親の話し相手になる」（3.94）、「入浴介助」（3.93）であった。父親の自己評価で頻度が高かった上記の 3 項目は、母親が評価した父親の育児行動頻度評価においても高く評価されたもので、育児行動の頻度に関しては父親と母親に同様の結果が示された。また、一方「就寝介助」（2.87）、「歯磨き」（2.98）、「食事介助」（2.96）、「家事」（3.09）の項目については父親の自己評価が低いことが示された。これも母親による父親の育児行動頻度評価と同様の結果であった。以上のことから、頻度評価においては父親に対する母親の評価と父親の自己評価で大きな差は認められなかった。

3.6 父親の育児行動に対する印象評価の齟齬

本論では、父親の育児行動に対して 10 点を満点として母親からの印象評価と父親自身による印象評価を

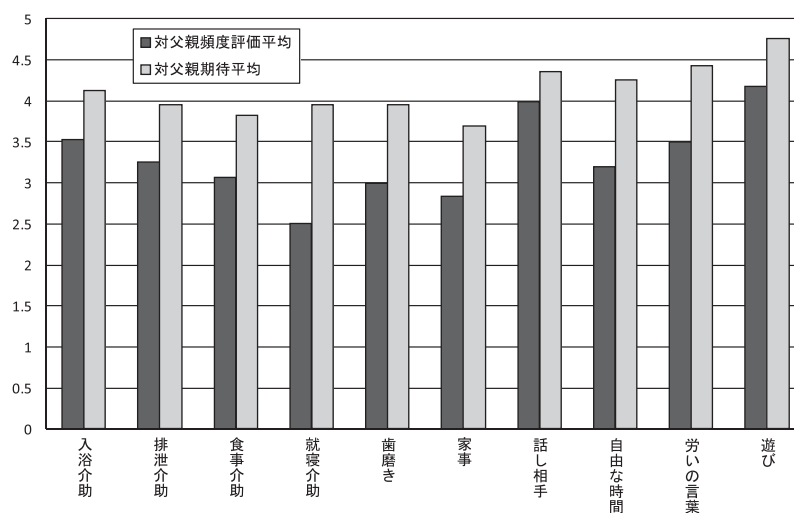


図 1 母親による父親の育児行動頻度評価および父親の育児期待

表 11 母親による父親の育児行動頻度評価および父親に対する期待

	入浴介助	排泄介助	食事介助	就寝介助	歯磨き	家事	話し相手	自由な時間	労いの言葉	遊び
対父親頻度評価平均	3.53	3.25	3.07	2.50	3.00	2.84	3.99	3.20	3.50	4.18
SD	1.15	1.16	1.14	1.31	1.44	1.24	1.08	1.20	1.26	1.04
対父親期待平均	4.13	3.97	3.83	3.96	3.96	3.70	4.36	4.26	4.43	4.76
SD	0.84	0.89	0.89	1.00	0.89	1.14	0.72	0.72	0.66	0.51
差	0.61	0.72	0.76	1.46	0.96	0.86	0.37	1.07	0.93	0.58

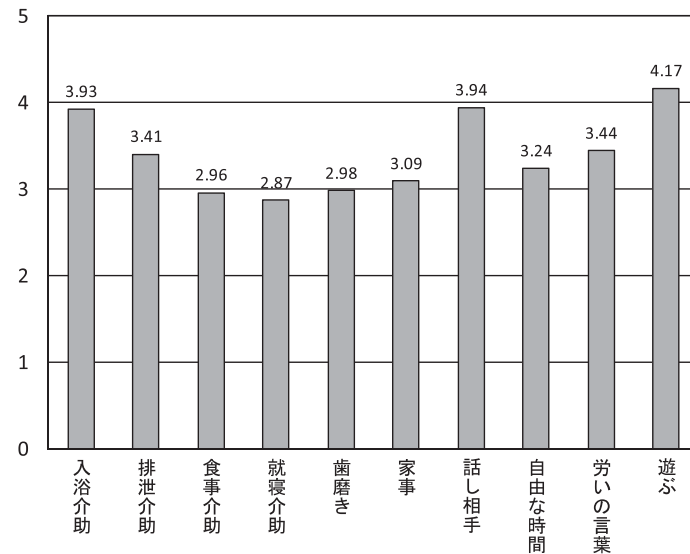


図2 父親による育児行動の頻度自己評価

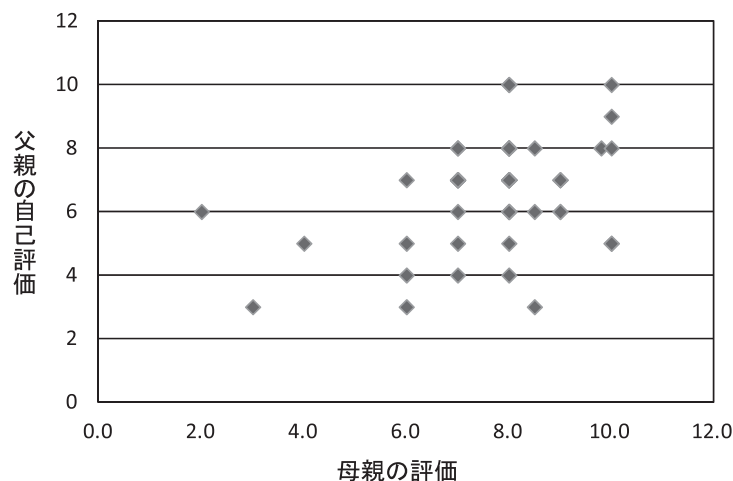


図3 父親の育児に対する父母の評価 (N=54)

尋ねた。ここでは、父親の子育て行動に対する母親、父親それぞれの印象評価得点について検討する。印象評価得点を検討するにあたって、分析の対象者の母親と父親が夫婦の組みであることが重要であると考え、分析対象は、データのある父親54名とその配偶者として対になっている母親54名を分析対象とした。

まず、父親の子育て行動に対する母親-父親間の評価の差を検討するため、評価得点平均を比較した。父親の子育て行動に対する母親の印象評価平均は、10点を満点として7.70 ($n=54$, $SD=1.56$)であった。父親自身による印象評価平均は、6.61 ($n=54$, $SD=1.63$)であった。二つの平均値の差を比較するため、対応のあるt検定を行ったところ有意な差が認められた ($t(53)=4.47$, $p<.01$)。すなわち、父親の子育てに対する評価は母親の評価と比較して父親の自己評価が低かった。

次に、母親の評価と父親の自己評価の関連を検討するため、2つの変数間の相関分析を行った。スピアマンの積率相関を用いて相関を算出したところ弱い正相関が認められた ($r(54)=.38$, $p<.01$)。

3.7 父親の育児に対する父親-母親間の評価の齟齬と母親の育児ストレスとの関係

3.7.1 相関分析から

夫婦を組みとして父親の育児に対する父親の自己評価得点から母親の評価得点を引いたものを父-母間の「評価差点」とし、母親の育児ストレスの各因子得点と評価差点との相関を算出した。

その結果、父-母間の評価差点と育児ストレス「父親の支援の無さ」得点、及び「育児不安」との間に有意な相関が認められた (父親の支援の無さ: $r(54)=.38$, $p<.01$), 育児不安: $r(54)=.30$, $p<.05$)。

すなわち、母親の評価よりも父親の自己評価が高く、父親が自身の育児に対して過大評価しているほど、母親の「父親の支援の無さ」および「育児不安」ストレスの高いことが示された。父-母間の差分得点と「心身の疲労」ストレス得点との間には有意な相関は認められなかった(表 12 参照)。

表 12 評価差分得点と育児ストレス 3 因子得点との相関

	心身の疲労	育児不安	父親の支援の無さ	評価差分得点
心身の疲労				
育児不安	.52			
父親の支援の無さ	.27	.19		
評価差分得点	.21	.30*	.38**	

3.7.2 父-母間の評価の差に基づいた群分けごとの育児ストレス 3 因子得点平均の比較

父親の育児に対する父-母間の評価の差と育児ストレス得点との関連を検討するため、評価差分点に基づいて 54 組の夫婦を 3 つの群に分け、3 群間で育児ストレス得点を比較した。すなわち、父親の自己評価が母親の評価より高い群を「父親過大評価群」、父親の自己評価と母親の評価が等しい群を「父母等評価群」、父親の自己評価が母親の評価よりも低い群を「父親過小評価群」とした。それぞれの組み数は、父親過大評価群が 7 組、父母等評価群が 14 組、父親過小評価群が 33 組であった。この 3 群を評価差群要因として 3 群間で母親の育児ストレス 3 因子ごとの因子得点の平均を、被験者間被験者内 2 要因分散分析を用いて比較した。

その結果、評価差群要因(「父親過大評価」群、「父母等評価」群、「父親過小評価」群の 3 水準)の主効果に有意傾向が認められた($F(2,51) = 2.42, p < .1$)。すなわち、父親の育児に対して父親の自己評価が母親

の評価よりも高くなるほど育児ストレスが高まる傾向が示された。また育児ストレス因子要因の主効果に有意な効果が認められた($F(2,102) = 12.87, p < .001$)。Ryan 法を用いて下位検定を行ったところ、5% の有意水準で、「心身の疲労」が「育児不安」、「父親の支援の無さ」よりも高いことが示された。また「育児不安」と比較して「父親の支援の無さ」が高いことが示された。さらに、評価差群要因×育児ストレス因子要因の交互作用には有意な効果は認められなかった($F(4,102) = .17, n.s.$)。

第 4 章 考 察

本論の目的は以下の 3 点である。第一の目的は、母親による父親の育児行動の頻度評価と母親の育児ストレスの関係を明らかにすることであった。すなわち、父親の如何なる育児行動が、母親のどのような育児ストレスをどの程度低減させるかを明らかにすることである。目的の第二は、父親の育児行動頻度を、母親、父親のそれぞれがどのように評価しているかを明らかにすることである。これによって、父親の育児行動頻度に関する父親の自己評価と母親の評価との違いを検討する。目的の第三は、母親が評価する父親の育児行動頻度と母親が父親に望む育児行動について検討することである。目的の第四は、父親の育児行動に対する、父-母間の評価の齟齬と育児ストレスについて検討することである。

4.1 母親による父親の育児行動頻度の評価と育児ストレス

本論の目的の一つは、母親による父親の育児行動の頻度評価と母親の育児ストレスとの関連を検討することであった。そこで本論では、育児ストレスの 3 つの

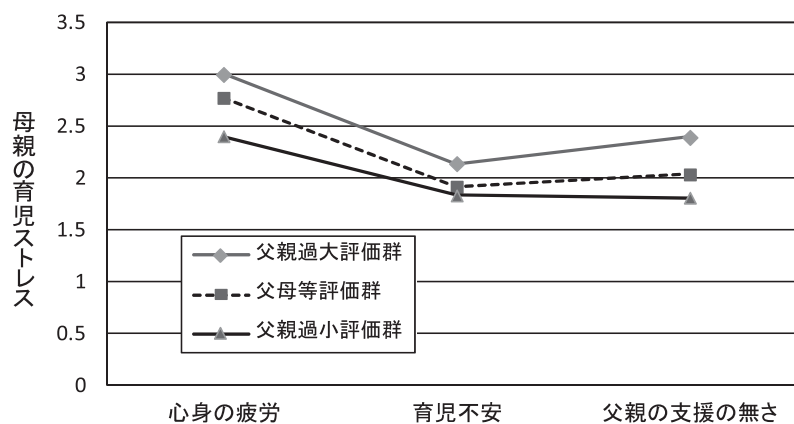


図 4 父母間の評価差と母親の育児ストレス

下位因子、「心身の疲労」、「育児不安」、「父親の支援の無さ」のそれぞれの因子得点を目的変数とし、父親の育児行動頻度尺度の3つの因子「対子ども育児」、「対母親支援」、「遊び支援」の因子得点を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果、「心身の疲労」得点、「育児不安」得点に関しては、父親の育児行動頻度の有意な影響は認められなかった。しかしながら「父親の支援の無さ」得点に関しては、「対子ども育児」得点、「対母親支援」得点、「遊び支援」得点のいずれもが有意な影響を示した（図5参照）。偏回帰係数を見るといずれも負の値を示していることから、父親の育児行動の頻度が高くなるほど、「父親の支援の無さ」に関するストレスが低下することを示している。ここで注目すべきは三種類の父親の育児行動の中でも、「対母親支援」が「父親の支援の無さ」ストレスの低減に最も大きく影響することが示された点である。第一章でも述べたようにこれまで、父親の育児行動頻度が増加するほど母親の育児ストレスが低下することは先行研究によって示されていた（岡本ら、2002）が、父親のいかなる育児行動が母親の育児ストレスにどの程度影響するかは示されていなかった。今回、父親の育児行動を3つにカテゴリー化した上で育児ストレスに対するそれぞれの影響を同時に検討した。その結果として、子どもに対する直接的な育児行動以上に、母親に対して働き掛ける「対母親支援」がストレス低減に最も有効であることが示された点は意義が大きい。すなわち、母親が“夫からの支援がある”と感じるのは、母親が「子どもに対する父親の育児」を感じる時よりも、母親に対して「労いの言葉をかける」、「話し相手になる」、「父親が母親に対して自由な時間を作ろうと努める」など、「母に対する支援」があると母親を感じる時なのである。言い換えれば、母親のストレス認知に影響するのは、子どもに対する育児ではなく母親自身に対する直接的な支援であると言える。

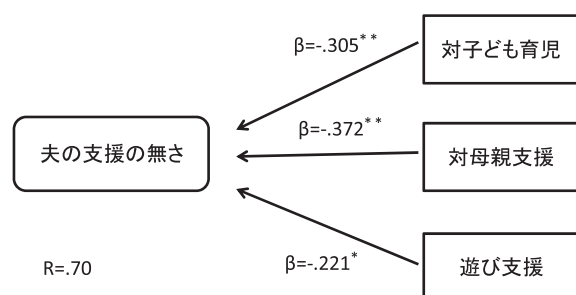


図5 母親を感じる「夫の支援の無さ」ストレスに対する父親の育児行動頻度の影響

また、父親の育児行動頻度評価が「心身の疲労」、「育児不安」の低減に寄与を示さなかった理由としては次の解釈が考えられる。すなわち父親の育児に対して母親を感じる不安全感である。「父親の支援の無さ」に含まれる項目の一つに、「夫の子育ては不完全で、かえって迷惑なことをする」という項目がある。つまり、育児に不慣れな父親が不完全な「対子ども育児」を行っている場合、頻度評価としては高くなるが、必ずしも育児ストレス低減に寄与していない可能性である。場合によっては育児行動の頻度が増加するほど逆に母親のストレスを増加させ、母親の「心身の疲労」をも引き起こしかねないのである。よって、単に父親の育児頻度のみではなく、その内容についても検討が必要と言えよう。

4.2 父親の育児行動頻度に関する母親の評価、父親の自己評価および母親の期待

父親の育児行動頻度に対する母親の評価と父親の自己評価を検討した結果、母親、父親いずれにおいても、最も頻度が高く評価されたのは、「子どもと遊ぶ」であった。母親評価と父親自己評価の差は、.01 ポイントであった。また、次いで高かったのが母親評価、父親自己評価共に「母親の話し相手になる」で、母親－父親間の評価の差は .04 ポイントであった。一方、頻度評価として低かったのは、「就寝介助」で父親の自己評価が 2.87、母親の評価が 2.50 で差は .37。次いで低かったのは、「食事介助」で、夫の自己評価が 2.96、母親の評価が 3.07 で差が .01 であった。今回の分析では、「家事」は夫の育児行動リストから削除したが、その頻度評価を見てみると、父親の自己評価が 3.09、母親の評価が 2.84 で差が .25 であった。以上のことから考えると、頻度平均に直した場合、父親の自己評価と母親の評価ではほとんど差が認められなかった。

一方、母親が父親に期待する育児行動を見ると、すべての項目において評定値は 4 前後で、母親による父親の育児行動頻度評価および父親による自己評価を上回った。中でも、評定値が 4（「望んでいる」）を超えたのは、「子どもと遊ぶ」（評定値 = 4.76）、「母親に労いの言葉をかける」（評定値 = 4.43）、「母親の話し相手になる」（評定値 = 4.36）、「母親に自由な時間を作るよう努める」（評定値：4.26）、「入浴介助」（評定値：4.13）であった。評定値 4 を超えた 5 項目のうち、3 項目が「対母親支援」に含まれる項目であったことから、母親が父親に期待する支援は、子どもに

関わる育児ではなく、母親のメンタルサポートであることがわかる。

また、期待が最も高かった育児行動は、「子どもと遊ぶ」ことであり、「対子ども支援」に関する項目は、相対的に期待が低かった。このことは、母親は父親により積極的な育児への関わりを望んでいるが、現実には遅く帰ってくる夫に就寝介助は望めず、またそれ以上の育児はかえって自分（母親）の負担を増加させかねないので、「子どもをお風呂に入れて、遊んでくれば十分」という、母親の葛藤を示しているのかもしれない。いわば、父親の育児行動頻度に対する母親の評価、父親の自己評価母親の期待の三つの評価から浮かび上がってくるのは、母親の父に期待する理想と、現実に即した諦めとの入り交じり合った複雑な“期待”の姿と言えるのかもしれない。

4.3 父親の育児行動に対する印象評価

本論では、父親の育児行動の頻度評価に加えて、父親の育児に対する全般的な印象評価を、母親、父親の両方に尋ねた。評価の父-母間の違いを平均値で比較した結果、母親の評価と比較して父親の自己評価は低いことが示された（母親による評価=7.70、父親の自己評価=6.61）。また、母親の評価と父親の評価を夫婦で組みにした相関分析では、弱いながらも正の相関が示された ($r(54) = .38, p < .01$)。このことから、父親の育児に対して母親からの評価と父親の自己評価は一致する傾向があるものの、父親の方が低く評価していることがわかる。このことは、母親は父親の育児の現状に満足し、一方父親はより現状よりも積極的な関わりを望んでいるとも解釈できるであろう。

一方、父親の育児行動に対する父-母間の評価差

(「評価差分点」：父親の自己評価-母親による自己評価)と育児ストレスとの関連を検討した結果、評価差分点と「育児不安」ストレス、「父親の支援の無さ」ストレスとの間に弱い相関ではあるが関連が示された。さらに、評価差分点に基づいて、夫婦の組みを、「父親過大評価群」、「父母等評価群」、「父親過小評価群」に分け、母親の育児ストレス得点との関連を検討した結果、有意傾向ではあるが育児ストレスに対して「評価差分」要因の効果が示唆された。すなわち、父親の育児に対して母親の評価と比して父親の自己評価が高いほど、母親の育児ストレスが高くなる可能性が示唆された。

この結果は、母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響を考える上で、以下の点において重要な示唆を与えるものと言えよう。一つ目は、母親の育児ストレスを検討する上での育児行動の頻度のみを指標とすることの限界が示唆されたことである。ここまで、父親の育児行動の頻度のみの分析では、育児ストレスの3因子のなかでも「父親の支援の無さ」ストレスへの影響のみしか認められなかった。しかし、父親の育児行動に対する母親の評価と父親の自己評価とのずれを指標とした場合、頻度分析から導かれた「父親の支援の無さ」ストレスに加えて、「育児不安」ストレスとの関連が示された。言い換えれば、父親の育児行動が母親の育児ストレスに及ぼす影響は、単に、父親がどれほど育児に関わったかという頻度によってのみ説明されるものではなく、子育てに関わる夫婦間の齟齬という夫婦の関係のあり方によっても説明されるものであることが示されたのである。さらにこの夫婦間の齟齬の影響は、「父親の支援の無さ」への不満という母親の心のあり方としてのストレスにとどまら

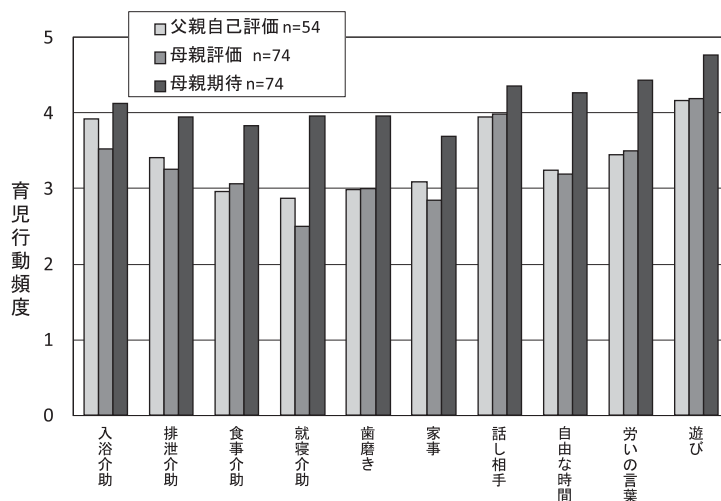


図6 父親の育児行動に対する母親の評価、父親の自己評価

ず、「育児不安」にまでその影響が及ぶことが示唆された。夫婦の関係のあり様が、夫婦間の認識の齟齬という形で、育児ストレスに影響を及ぼすことが示されたことは、母親の育児ストレスを考える上で重要な視点を与えるものであると言える。

4.4 総合考察と残された問題

本論の目的は、母親の育児ストレスを低減させるために、最大の育児資源である父親がどのように育児に関わればよいのかを検討することであった。この目的に添って本研究から導かれる示唆は以下の2点である。すなわち①父親が直接子どもに働きかける対子ども育児を行うよりも、育児という意味においては間接的な関わりともいえる対母親支援を行うことが、母親の「父親の支援の無さ」ストレスを低減させること。②父親が自身の育児行動の評価を母親のそれと比して過大評価することが、母親に「育児不安」および「父親の支援の無さ」を感じさせることである。特に、父親が自身の育児行動を母親と比して過大評価している場合、すなわち父親が自身の育児に対して独りよがりの評価になっている場合、母親の育児ストレスが高くなることが示された。このことは、父親の育児行動が“育児資源”としてその頻度のみが指標として問題にされることの多かったこれまでの「父親の育児」研究に対して、育児に対する夫婦間の意識の問題という新たな視点を示したと言えるであろう。

しかしながら、父親の育児過大評価が何ゆえに母親の「育児不安」や「父親の支援の無さ」ストレスを増加させるのか、その機序に関しては不明である。また、そもそも父親の育児に対する父親-母親間の評価の齟齬が如何なる機序のもと生じるのかについても今回の分析からは示し得ておらず、今後に残された課題の一つであろう。

また検討が残されたもう一つの課題として、調査対象者の偏りの問題がある。本調査の調査協力者は、昼間、大学の子育てひろばに子どもと共に参加することが可能な母親をその対象としている。よって、その基本属性の分析結果からも分かるように、対象者の多くが専業主婦であり、父親の収入だけで家計が成り立っている、経済的に比較的余裕のある環境にあることが推測される。いわば、母親が子育てに専念できる環境にある家庭が調査対象となっているであろうことが推測されるのである。このことが、父親以外の育児資源の有無によって母親の育児ストレスに明確な差が認められなかった理由としても考えられるであろう。よっ

て、仮に本調査を共働きの家庭を対象とした場合、今回の結果とは異なる結果が得られる可能性も考えられるのである。今後の課題としては、対象者を共働きの家庭にも広げ、共働き家庭における父親の育児行動及びそれに対する母親の評価と母親の育児ストレスとの関連を検討するべきであろう。

注

- 1) 一般的に印象評価とはある対象に対して、形容詞(対)を用いてあてはまる程度を5段階あるいは7段階等で回答させる方法であるが、本論においては全般的な「父親の育児」に対するおおよその印象を10段階(10点満点)で評価するという意味で、「印象評価」と表現することとした。
- 2) 本来ならば「父親の育児行動に対する母親の頻度評価」と「父親の育児行動に対する母親の期待」を直接比較することは出来ない。これは、質問項目の各評定項目が異なるからである。すなわち「父親の育児行動に対する母親の頻度評価」では、「よくする」から「全く行わない」の評定であり、「父親の育児行動に対する母親の期待」では、「とても望んでいる」から「全く望まない」の評定であるためである。しかしながら、いずれの尺度も5段階評価で評定するため、例えば、「現在の父親の頻度を3と評定するなら、私の期待は4である」というように、相対的な評価がなされていると見ることも可能であろう。よって、本論では一つの資料として、“母親による父親の育児頻度評価”と“母親の父親に対する育児期待”を数値として比較を試みた。

参考文献

- 伊藤裕子・相良順子・池田政子(2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74(3), 276-281.
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5(1), 72-83.
- 北村愛子・佐鹿孝子・大久保ひろ美・佐藤はつ子(1999). 父親の育児参加と母親の育児不安との関連 - 204組の夫婦アンケート調査より - 山梨県立看護大学短期大学部紀要, 5(1), 61-76.
- Lamb, M. E. (1975). Fathers: Forgotten Contributors to Child Development. *Human Development*, 18, 245-266.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*. (本明寛・春木豊, 織田正美監訳. (1991). 『ストレスの心理学』.)
- LION ソフラン バイバイ! ママストレスプロジェクトより(2012). 主婦のストレスと柔軟剤の香りに関する調査 <http://www.lion.co.jp/ja/company/press/2012/2012033.htm>
- 三上智美・掛谷益子(2011). 母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究 インターナショナル Nursing Care Research, 10(1), 75-83.

岡本絹子・中村裕美子・山口三重子・奥山則子・標美奈子・渡部月子 (2002). 乳幼児をもつ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究 小児保健研究, 61(5), 692-700.

桜井茂男・大谷佳子 (1997). ”自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68(3), 179-186.

清水嘉子 (2001). 育児環境の認知に焦点をあてた育児ストレス尺度の妥当性に関する研究 ストレス科学, 16

(3), 176-186.

清水嘉子・関水しのぶ (2010). 母親の育児ストレス尺度——短縮版作成と妥当性の検討. 子どもの虐待とネグレクト, 12(2), 261-270.

柳原真知子 (2007). 父親の育児参加の実態 天使大学紀要, 7, 47-56.

尹靖水・朴志先・近藤理恵・桐野匡史・中嶋和夫 (2011). 父親の育児参加の促進・阻害要因に関連する仮説の実証的検討 社会科学, 94, 15-26.